

万年助手、リスク学の草分けに

リスク研究

中西 準子

①

人生の みちしるべ

(産業総合研究所
安生科学研究部門長)

——化学物質や食品の安全性、温暖化などの環境問題と、現代は問題が山積です

水俣病のような公害は誰の目にも明らかで、そこで特定の人びとが苦しんでいるのが見える問題。けれど現代の安全性の問題や環境問題は、将来いつか何かが多くの人に起こるかも知れない、というリスクの話。根本的に違います。

例えば殺菌剤には相応のリスクがある。でも感染症のリスクを減らす効果、ペネフィットもある。リスクがあるから即禁止ではなくて、リスクとペネフィットを事実に基づき勘案しながら、何を禁止するのが判断していい必要があると思います。

——中西さんが「リスク学」を

始めたのは、80年代半ばと聞いています

下水処理水でもリスクは残るので、飲用水を取る川に処理水を流してはいけない——当時はそんな観点で流域一帯の下水を最下流の下水処理場に下水管き



研究室にて (撮影・池辺貴洋)

場を作って川に処理水を流すと、下流で取る飲用水の汚染度は上がる。安全性の追求のためにリスクを下げようとすると、自然に悪影響を及ぼすことになるわけです。この解決策がどうしても見いだせず、長い間悩みました。

よて集める、流域下水道が進められていました。取水すること川幅は狭まり、川には水を戻さないためほとんど水量のない部分も出てくる。これは生態系によくないと考えました。でもやっぱり、上流の市で下水処理

場を作ると、確率論で集め、化学物質の濃度をかなり下げるといふ触れ込みです。ところが私が調べてみると、重金属の60〜90%はそのまま川に流されていることがわかりました。多様な工場・家庭の排水を一手に引き受けるから、大量の水の中で一つ一つの有害物質の濃度は薄まる——ただそれだけの話だったので。さらに辛うじて汚泥に移行した重金属も、焼却過程で気化されて大気中に放出されていることがわかりました。

数年で世間にも広まり工場排水を規制する下水道法改正にもつながりました。

ただ、浮間処理場の調査許可の取得も困難でしたが、結果の公表の際は東京都や教授から発表しないよう圧力がかりました。結果的に岩波書店の『公害研究』創刊号に掲載されましたが、結果の公表は教授や学会、行政との対立を決定的にし、20年以上助手に留め置かれ、私の指導学生の進学や就職への執拗な妨害も続きました。

(聞き手・菱山哲彦)

1938年中国・大連生まれ。61年横浜国立大学工学部卒、67年東大工学系研究科博士課程修了。68年より90年まで工学部助手。90年に環境安全センター助教(当時)となり、93年に東大工学系で初の女性教授に。その後横浜国立大学教授を経て、01年に産業総合研究所(産総研)に移籍。08年より現職。03年に紫綬褒章受章。

次回からは中面に掲載する予定です。